ベトナムツアー

１）1 月 22 日　　ハノイ着　ホテルへ　Movenpick Hotel Hanoi ****

２）1 月 23 日　　ホテルで朝食　終日ハノイ市内の観光 昼食込み

観光予定：狭い道にある伝統的な商店街や美しい公共の場―湖、公園、並木のある大通りや記念碑を見てまわります。その他観光施設は Temple of Literature, One Piller Pagoda, Ho Chi Minh Memorial Complex, Hoan Kiem Lake, Tortoise Pagoda, Old Quarter, History Museum or Museum of Ethnology などです。

宿泊：ハノイ＝Movenpick Hotel Hanoi****

３）1 月 24 日　　ホテルで朝食　ハノイからハロンベイへ車で移動

ハロンベイで 4 時間自由行動―ボートと昼食込み―紺碧の水とでこぼこした石灰岩の岩壁の美しい湖で木製のボートを楽しむ―途中、沢山の洞穴、美しい小島、水上の村落、漁師達の網打ち、真珠採り漁師などを見てまわります。

宿泊：ハロンベイ＝Novotel Ha Long Bay ****　夕食：ホテルで

４）1 月 25 日　　ホテルで朝食　ハロンベイから車でハノイに戻る

午後自由行動　　夕方：水操りショウ見物　夕食

宿泊：ハノイ＝Movenpick Hotel Hanoi ****

５）1 月 26 日　　ホテルで朝食　　ホテルからハノイ空港　ダナンへ向けて飛ぶ

観光：ダナン（ヴェトナム最大の都市）からホイアンに向かう途中 Cham Museum, China Beach, Marble Mountains を見物

宿泊：ホイアン＝Swiss-Belhotel Golden Sand Resort*****

６）1 月 27 日　　ホテルで朝食

観光：歴史的なホイアンの町を徒歩で見物　＝　ホイアンはダナンの南で絵のように美しい川沿いの町、１７－１９世紀の東南アジアでの主要な国際港のひとつであった。

見てまわる所：Japanese Covered Bridge Pagoda, Sa Huynh Museum, Tran Family Chapel, Phuoc Kien Assembly Hall, Lantern Making Workshop

それから、車で観光道路を走り美しい海岸線を見ながらヒューへ向かう、途中 Hai Van Pass 峠＝ベトナムの北と南を分かつ気温帯＝を越します。　引き続きランコー＝紺碧の湖と南支那海にまたがる美しい半島＝を過ぎヒューに到着します。

宿泊：フエ＝La Residence Hotel and Spa*****

７）1 月 28 日　　ホテルで朝食　夕食込み

観光：朝からボートで Perfume River 川を下り Thien Mu Pagoda（ヒューで有名な 7 層の八角塔）を見て後、郊外へ出て Imperial Tomb of Minh Mang(神秘的な自然に溶け込んだ諸建築物）を見物。　その後昔の都へ、Imperial Citadel, Flag Tower, Ngo Mon Gate, Dien Tho 邸宅, Thai Hoa Palace Halls of th Mandarins, Nine Dynastic Urns 等見物。

宿泊：フエ＝La Residence Hotel and Spa*****

８）１月 29 日　　ホテルで朝食

観光：フエの町（140 年以上に亘りヴェトナムの首都であった）－　Imperial Tombs of Tu Duc & Khai Dinh を見てまわる。　後、空港へ　サイゴン（ホーチミン市）へ向けて飛ぶ

宿泊：サイゴン＝Majestic Saigon*****

９）１月 30 日　　ホテルで朝食　終日観光

観光：Cu Chi Tunnels, Reunification Palace, War Remnants Museum, Emperor of Jade Pagoda, Notre Dame Cathedral, Central Post Office を見て City Hall, Opera House を外観して後 Ben Thanh Market マーケットへ。

宿泊：サイゴン＝Majestic Saigon*****

１０）１月 31 日　ホテルで朝食　終日観光　　夕食込み

観光：メコンデルタへ観光　車でカイビーへボートに乗船、カイビー水上マーケットとメコン川小島へ。　サイゴンへ車で戻る

宿泊：サイゴン＝Majestic Saigon*****

１１）２月１日　ホテルで朝食

帰国：サイゴン空港へ車で向かう

ベトナムの歴史

紀元前から北部ベトナムの紅河（ホンハー）流域一帯には東南アジア最古の青銅器文化として知られる東山（ドンソン）文化が広がり、原始的な部族国家群を形成していた。これがいわゆる古越人（後のベト族）である。また中国・紹興一帯を支配した越の末裔が、民族のルーツとの説もある。 秦始皇帝以後、千年にわたって中国王朝の郡県支配を受け、中国文化の影響が深く浸透したが、完全に中国化することはなかった。一方中部ベトナムではオーストロネシア語族系統の古チャム人（後のチャム族）がインド化されたチャンパ王国を形成していた。唐末五代の混乱で中国の支配が後退すると 939 年に最初の民族王朝呉朝が成立、以後越人の王朝「大越」が続く。大越は南のチャンパと抗争を繰り返したが、チャンパ領は 14 世紀に越都昇龍（タンロン）を 2 度攻略した制逢峨（チェーボンガー）の死後内紛で割拠状態に陥り、1471 年以降大越黎朝（1428 年-1788 年）及びその諸侯である広南阮氏がこれらを各個撃破して南進し、広南阮氏は更に 17 世紀にカンボジア領であったメコン川流域まで併合して今日のベトナム領土が完成した。

南北分断時代 [編集]

- 1945年8月17日 - ベトナム独立同盟（ベトミン）がハノイを占拠（ベトナム八月革命）。
- 1945年9月2日 - ベトナム民主共和国の樹立を宣言、ホー・チ・ミンが初代大統領に就任。同日、大日本帝国政府が降伏文書に調印し、第二次世界大戦が公式に終結した。
- 1946年11月 - ハイフォン（海防）でフランス軍と衝突
- 1946年～1954年 - フランスに対する独立戦争（第一次インドシナ戦争）
- 1949年 - フランスはサイゴンにバオダイを復位させ、ベトナム国として独立を認める。中国、ソ連は、ベトナム民主共和国を承認
- 1954年7月 - ディエンビエンフーの戦いでフランスは敗北、ジュネーヴ協定を結び、ベトナムから撤退、独立戦争終結。同時に、北緯17度線で国土がベトナム民主共和国（北ベトナム）とベトナム国（南ベトナム）に分断される。10月、南ベトナムではアメリカを後ろ盾にゴ・ジン・ジェムが大統領に就任、国名をベトナム共和国にする
- 1960年12月 - 南ベトナム解放民族戦線結成。
- 1962年2月 - アメリカはサイゴンに援助軍司令部を作り、軍事介入、ベトナム戦争（第二次インドシナ戦争）が始まる。
- 1964年 - トンキン湾事件。以降、1973年まで米軍が戦争に直接介入。
- 1965年2月 - アメリカは北ベトナム爆撃を開始、本格的な戦争に突入
- 1968年1月 - 南ベトナム全土で解放戦線・北ベトナムのテト攻勢、アメリカは大打撃を受ける
- 1969年1月 - 南北ベトナム、解放戦線、アメリカの4者によるパリ和平会談が始まる
    - 6月 - 南ベトナムで、解放戦線は南ベトナム共和国革命臨時政府建設。ベトナム共和国と対峙。
- 1972年4月 - アメリカ・ニクソン政権は北爆を再開
- 1973年1月 - 南北ベトナム政府、臨時革命政府、アメリカの4者は、パリ和平協定に調印
- 1975年4月30日 -北ベトナムと解放戦線は春の大攻勢を行い、南ベトナムのズオン・バン・ミン大統領は全面降伏、サイゴンは陥落、ベトナム共和国崩壊。南ベトナム共和国の名の下に北ベトナムが実権を掌握。ベトナム戦争終結。[3][4]

南北統一以後 [編集]

- 1976年4月 - 南ベトナム消滅による南北統一。初の南北統一選挙を行う。
- 1976年7月2日 - ベトナム民主共和国を**ベトナム社会主義共和国**に改名。
- **日本との関係** [編集]
-

-
- ホイアンの日本橋。この橋は鎖国前の交易のあった頃に日本人によって作られたと言われ[1]、今でも現地の人に大切に使われている。提灯にフェホォと書いてあるが、これは当時のこの町の呼称である。世界遺産。
- 西暦734年遣唐使判官・平群広成が帰国の途上、難破して崑崙国に漂流し抑留された。フエ付近に都があったチャンパ王国と考えられる。広成はその後、中国に脱出し、渤海経由で帰国している。753年には遣唐使藤原清河や阿倍仲麻呂が帰国の途上、同じく漂流し、当時中国領だったの安南のヴィン付近に漂着した。東シナ海から南シナ海に南下する海流の関係でこのような漂流ルートが存在したようだ。これが縁で阿倍仲麻呂は761年から767年まで鎮南都護・安南節度使としてハノイの安南都護府に在任した。
- 14世紀から15世紀にかけて交易国家として栄えた琉球王国はチャンパ王国とも通好があった。17世紀になると朱印船がベトナム方面へ進出し、江戸幕府は北ベトナムの大越黎朝や南ベトナムの広南阮氏政権とも外交文書を交換し、朱印船が出入りした。ホイアン（会安）には日本人町も形成されている。朱印船はまた南遷していたチャンパ（占城）でも唐船（中国船）と出会い貿易を行っている。
- ベトナムの通貨の名称はドンだが、これはベトナムの主要通貨であった銅銭を意味する越語ドンティエンに由来する。日本の銅銭・寛永通宝はその材質の良さから、東アジアの基軸通貨の一つとして流通し、国際取引の決済に使われていた。1940年に日本軍は北部仏印進駐を行い、1941年には南部にも進駐した。これは、フランスのヴィシー政権との外交協議によるものであり、太平洋戦争中も、日本軍はインドシナ植民地政府と共存していた。他方でこの日本軍によるベトナム進駐は有色人種が数百年続いてきた白人至上秩序にはじめて亀裂をいれる出来事となり結果的に有色人世界に影響を与える転機となった。その後、日本軍は1945年3月にクーデターでフランスの植民地政府・軍を取り潰し、ベトナムを名目的に独立（ベトナム帝国）させたが、間もなく敗戦となった。しかし、その結果生じた権力の空白はベトナム独立同盟に有利に作用した。また、駐留期間の大半においてフランスの同盟国軍として植民地政府に加担したことは、結局のところ日本もフランスと同類の帝国主義国に過ぎないという印象を与えることになった。
- 第二次世界大戦末期の1945年に、ベトナム北部で大量の餓死者が発生した。餓死者は推計200万人に近いとされる。ホー・チ・ミンが独立宣言の中でフランス/日本の二重支配によって200万人が餓死したと演説しており、ベトナム国内ではこの200万人という数字は広く知られている。いずれにしろ、この件につき、日本に対しベトナム政府は外交問題として取り上げたことはない。より多くのベトナム人が、その後の第一次インドシナ戦争、ベトナム戦争で亡くなっているためと考えられている。
- 戦後、フランスが再び進駐してくると、仏軍とベトナム民主共和国軍の間で戦争（第一次インドシナ戦争）が始まったが、仏越両軍に日本軍兵士が多数参加した。当時、ベトナムには766人の日本兵がとどまっており、1954年のジュネーヴ協定成立までに47人が戦病死した。なかには、陸軍士官学校を創設して、約200人のベトミン士官を養成した者もおり、1986年には8人の元日本

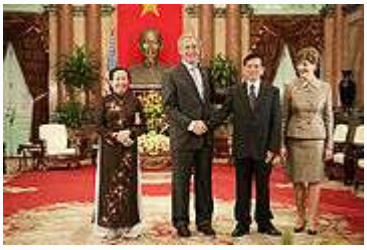
兵がベトナム政府から表彰を受けた。ジュネーヴ協定によって 150 人が日本へ帰国したが、その他はベトナムに留まり続けた模様である。

- 1951 年に日本政府はベトナム国（南ベトナム）と平和条約を締結し、1959 年には岸信介首相（当時）がベトナム共和国政府と 140 億 4000 万円の戦争賠償支払いで合意した。一方、ベトナム民主共和国（北ベトナム）は戦争賠償の請求権を留保したが、1973 年に外交関係が樹立するまで日本と北ベトナムは国交のない状況が続いた。
- 近年、日本企業のベトナム進出が相次いでいるが、その要因として中国の半分から 3 分の 1 ともいわれる賃金、AFTA（ASEAN 自由貿易地域）の推進に伴って ASEAN 域内への輸出拡大が見込める点、さらには中国一極集中のリスクの回避などが挙げられる。
- 現在、両国の関係は「*緩やかな同盟関係*」と評されている。ファン・ヴァン・カイ前首相は親日・知日家で知られており、また、日本政府や経団連も積極的に経済援助を行っている。一方、グエン・タン・ズン新首相は親中派で日本に対する関心が低いと一部報道で伝えられており、今後の両国の関係を懸念する向きもある。
- 日本共産党と全教は 1993 年よりフエ市でストリートチルドレンの保育・教育施設「ベトナムの子どもの家」（小山道夫、日教組分裂 1991.3.6 以前の都教組委員長 主宰）を運営している。小山自身は日本共産党員であるが、旧社会党系（現 民主党及び社民党）の活動家・政治家と親しく、1994 年 6 月 30 日から 1997 年 11 月 7 日の自社さ連立政権下においてはフエ省知事顧問として複数の日本 ODA 事業をフエに導入することに成功し、地元の信頼を勝ち得た。支援する「ベトナムの子どもの家を支える会」の活動も盛んであり、日本民主青年同盟、革新自治体の青年・学生組織及びピースボートと交流を行っている。
- 2007 年 2 月 27 日にはベトナムを南北に縦貫する高速鉄道の建設に向けて両国間で共同委員会が設けられた。委員会には日本から国際協力機構（JICA)、国際協力銀行（JBIC)、日本貿易振興機構（JETRO）が、ベトナムからは計画投資省、運輸省、ベトナム国鉄が参加した。

- 1978 年 12 月 - カンボジア侵攻を開始。（第三次インドシナ戦争の始まり。）
- 1979 年 - 中国との戦争（中越戦争）、世界各国は援助を停止し、ベトナムは孤立
- 1986 年 12 月 - 社会主義型市場経済を目指す、ドイモイ（刷新）政策を開始し、改革・開放路線に踏み出す
- 1989 年 9 月 - 国内経済が疲弊したベトナムは、カンボジアから完全撤兵
- 1992 年 - 越中関係正常化

- 1995年7月 - クリントン・アメリカ大統領がベトナムとの外交関係樹立を発表。1995年8月5日、ベトナムとアメリカが和解。
    - 7月 - 東南アジア諸国連合 (ASEAN) はベトナムの加盟（7番目の加盟国）を認める
    - 10月 - 所有権や契約の考え方を盛り込んだ、初めての民法ができる
- 1996年1月 - ASEAN自由貿易地域(AFTA)に参加する
- 1998年 - アジア太平洋経済協力(APEC)参加
- 2003年 - 日越投資協定締結
- 2007年1月11日 -世界貿易機関 (WTO) に正式加盟した。150番目の加盟国となった。
- 2007年10月16日 -国連総会で安全保障理事会の非常任理事国に初選出された。

アメリカとの関係 [編集]



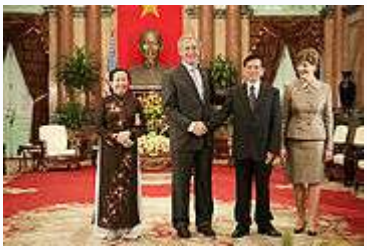
2007年、ブッシュ大統領とグエン・チェット国家主席

かつてベトナム戦争で現政権の北ベトナムにとっては敵対関係だった。南ベトナムからは多くの難民が流出し、カナダ、オーストラリア、フランス、アメリカへと移民した。サイゴン陥落後からソ連崩壊を経て、ドイモイ政策後の1995年8月5日、ベトナムとアメリカは和解し、アメリカとの国交が復活した。

2000年には両国間の通商協定を締結し、アメリカがベトナムを貿易最恵国としたこともあり、フォードやジェネラルモーターズ、コカ・コーラやハイアットホテルアンドリゾーツといったアメリカの大企業が、ドイモイ政策の導入後の経済成長が著しいベトナム市場に続々と進出し、2003年にベトナムの国防大臣はペンタゴンの歓迎式典で最大の敬意を払って迎えられた。ベトナム政府は経済、外交などで対米接近を基本政策としており、ジョージ・W・ブッシュ大統領の来訪も大歓迎している。対米関係への配慮から戦争中の枯葉剤などについても、あえて『民間団体』に担当させて、政府は正面に出てこないくらいアメリカに気をつかっており、一般のベトナム人も経済向上のためにはアメリカとの関係を緊密にするべきだと感じ、アメリカの観光客、企業代表などを熱く歓迎している。米軍に侵攻され多大な被害を受けたにもかか

わらず、政府・国民とも親米的な珍しい例である[2]。しかし 薬品会社は未だ枯葉剤問題に対して棄却し未解決でありアメリカに激しい憎しみを持つ者も存在する。

アメリカは南ベトナムからは 82 万ものベトアメリカとの関係 [編集]



2007 年、ブッシュ大統領とグエン・チェット国家主席

かつてベトナム戦争で現政権の北ベトナムにとっては敵対関係だった。南ベトナムからは多くの難民が流出し、カナダ、オーストラリア、フランス、アメリカへと移民した。サイゴン陥落後からソ連崩壊を経て、ドイモイ政策後の 1995 年 8 月 5 日、ベトナムとアメリカは和解し、アメリカとの国交が復活した。

2000 年には両国間の通商協定を締結し、アメリカがベトナムを貿易最恵国としたこともあり、フォードやジェネラルモーターズ、コカ・コーラやハイアットホテルアンドリゾーツといったアメリカの大企業が、ドイモイ政策の導入後の経済成長が著しいベトナム市場に続々と進出し、2003 年にベトナムの国防大臣はペンタゴンの歓迎式典で最大の敬意を払って迎えられた。ベトナム政府は経済、外交などで対米接近を基本政策としており、ジョージ・W・ブッシュ大統領の来訪も大歓迎している。対米関係への配慮から戦争中の枯葉剤などについても、あえて『民間団体』に担当させて、政府は正面に出てこないくらいアメリカに気をつかっており、一般のベトナム人も経済向上のためにはアメリカとの関係を緊密にするべきだと感じ、アメリカの観光客、企業代表などを熱く歓迎している。米軍に侵攻され多大な被害を受けたにもかかわらず、政府・国民とも親米的な珍しい例である[2]。しかし 薬品会社は未だ枯葉剤問題に対して棄却し未解決でありアメリカに激しい憎しみを持つ者も存在する。

アメリカは南ベトナムからは 82 万ものベトナムの難民を受け入れており、ベトナム系アメリカ人は故郷ベトナムに旅行するなど交流は活発になっているが、基本的に南ベトナムからの難民が大多数なので共産主義のベトナム本土とは対立が根深く、ベトナム政府の関係者の訪米には抗議する傾向がある。

ナムの難民を受け入れており、ベトナム系アメリカ人は故郷ベトナムに旅行するなど交流は活発になっているが、基本的に南ベトナムからの難民が大多数なので共産主義のベトナム本土とは対立が根深く、ベトナム政府の関係者の訪米には抗議する傾向がある。